

平塚市 真田城とその時代

平成 27 年 11 月 8 日 (日)

平塚市博物館 栗山雄揮

1 真田城の位置

真田城が立地する北金目台地は丹沢山塊の南端にあり、相模国のほぼ中央にあたる。台地北側は大根川によって丹沢山塊から隔てられ、その支流が台地にくつもの谷を刻みこんでいる。東側は金目川水系の沖積低地に面し、肥沃な水田地帯が広がっている。台地上は東海大学がある西部で標高 50 ～ 52m、東部の塚越古墳周辺で標高 36 ～ 37m、北東部の天徳寺境内は標高 25 ～ 27m を測り、台地東側の低地は標高 14 ～ 16m を測る。

その北金目台地の北東端部、大根川に面した台地上が真田城の中心とされている。

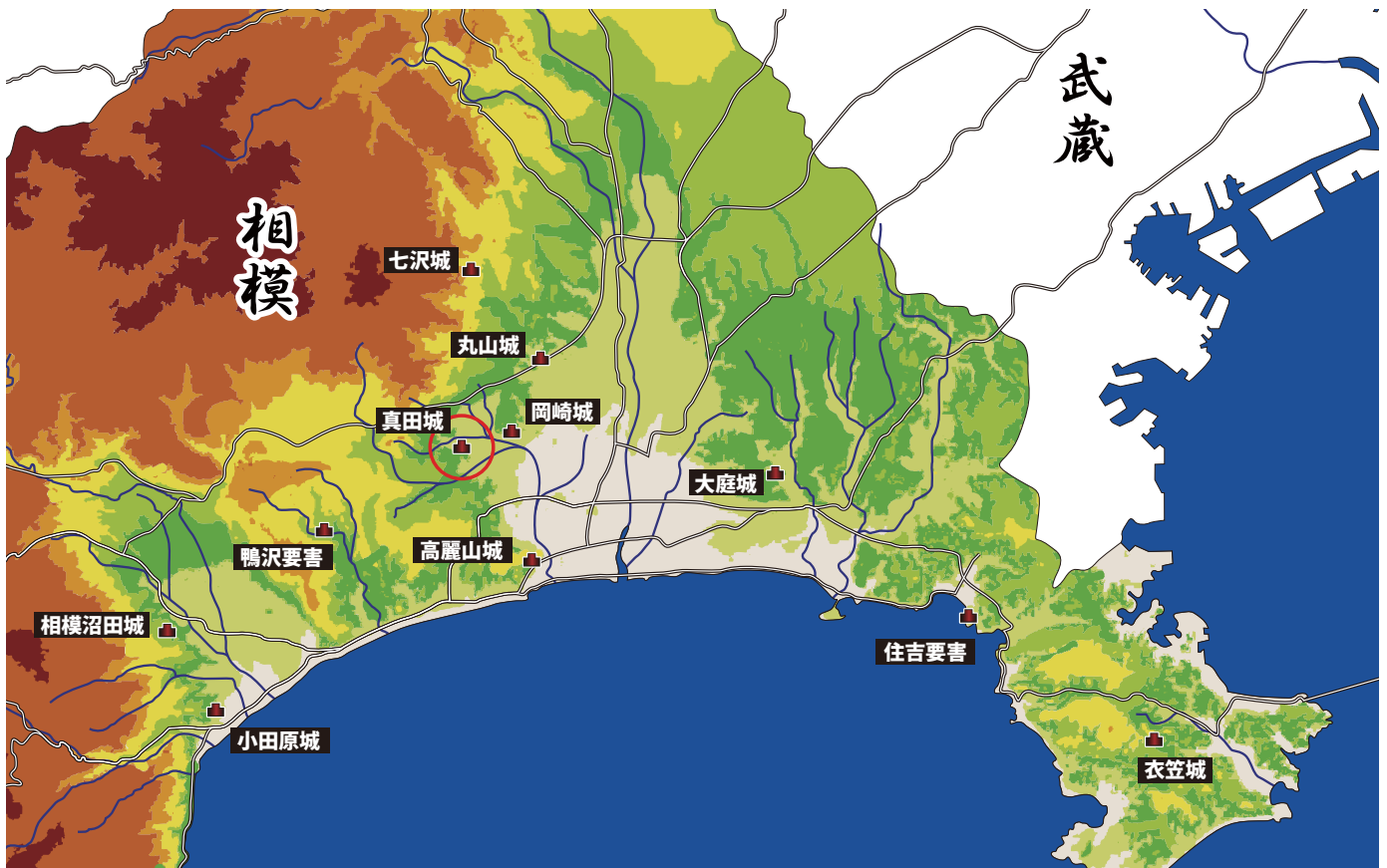


図 1 真田城の位置と相模国内の関係城館

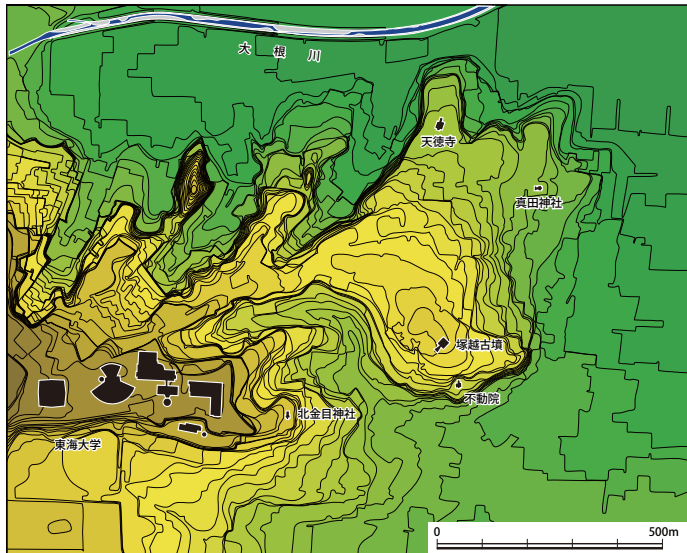


図 2 真田城周辺の地形



図 3 北東方向から真田城を望む

2 真田城の記録

- ① 明応五年（1496）、謀反した長尾景春に呼応して蜂起した相模国内の勢力に対し、関東管領山内上杉顕定が攻撃を仕掛けた。伊勢宗瑞の弟伊勢弥次郎の手の者と数多く討取り、大森藤頼（？）・扇谷上杉朝昌・三浦道寸・太田六郎右衛門尉・上田氏の一族・伊勢弥次郎らの要害（小田原城？）を自落させた。相模西部の様相は一変した。軍を東に進めて上田左衛門尉（上田正忠）が守る実田要害に近い所に陣取ったところ扇谷上杉朝良が来援し、長尾景春も出馬するとの情報があったので、そちらへ向かうこととした。（上杉顕定書状）
- ② 永正元年（1504）、駿河守護今川氏親とともに相模に侵入した伊勢宗瑞は、扇谷上杉朝良側として山内上杉顕定・憲房の軍を武蔵立川原に破る。しかし、越後守護代長尾能景の援けを得た山内上杉軍は反撃に転じ、武蔵の柵田要害に続いて上田氏の実田要害を陥落させる。（歴代古案、発智文書）
- ③ 天正・文禄年間（1573～1595）に、小田原北条氏の家臣鈴木隼人某が城地に天徳寺を造立。四方に堀がある。
（新編相模国風土記稿 真田村）

3 真田城の説明

- ① 土塁は東と北側にみられ、東側のは痕跡程度、北側土塁は高さ 1.7m を測る。また北側土塁の東北角には、幅 5m、長さ 16m の櫓台が現存する。『新編相模国風土記稿』にいう四方の堀のうち、南の堀切は山門内の微低地の畑と想定され、それは幅 25m に達するが、全体に造成が進み、表面観察から遺構の規模を判断するのは難しい。残る三方の堀は、本郭の裾にあるが、西堀は堀向（堀の外側の壁）を失い、幅 15m の平坦面となり、腰郭状を呈している。北堀は西堀より 15cm ほど低く、幅 12m の堀向の痕跡を残し、堀底の幅は 11m に達している。東堀は北堀より 2.2m 高い位置にあって段違いで接し、本堂東南の竹藪に至っている。各堀の堀底から郭土塁頂部までの比高は北堀の西で 4.7m、東の櫓台とは 6.4m、また東堀では 4～5m ほどである。（日本城郭大系 1980）

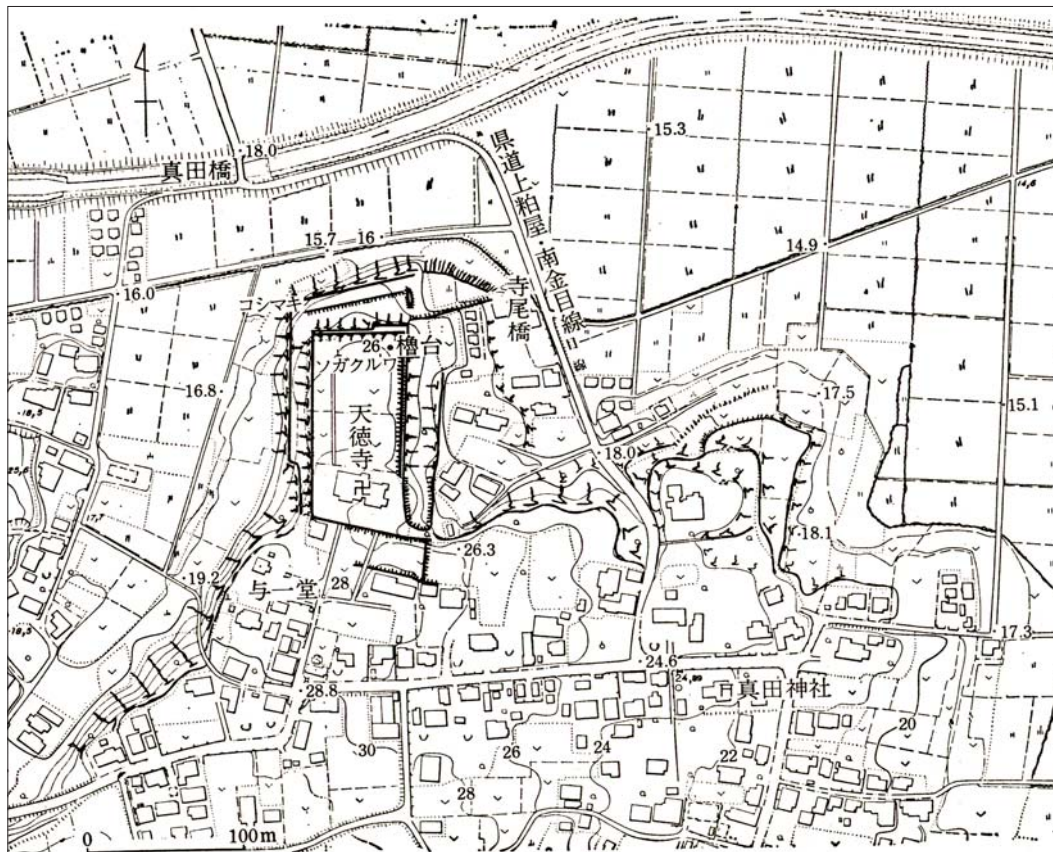


図4
日本城郭大系に掲載されて
いる「真田城要図」

- ② 現状と遺構 天徳寺境内、北・東・西及び天徳寺を隔てた東側伝承地鬼城と呼ぶ地があり、いずれも城址の範囲であるが、天徳寺境内には堀跡又は土塁、腰曲輪、鬼城の部分にも腰状の曲輪が現存する。範囲は防備性と点からしても北金目の不動院、北金目神社等を含めた規模を想定したい。（中世平塚の城と館 1982）

4 東海大学の調査と研究

1990年代以降、東海大学校地内遺跡調査団が実施した王子ノ台遺跡（東海大学大学構内）の発掘調査でいくつかの切り岸、テラス状遺構が確認され、真田城との関連が指摘された。吉田博之氏は台地全域に見られる人為的な防御構造の存在を指摘し、これらの状況から北金目台地の西部、南北双方向から入り込む谷戸によって狭められた台地の「基部」を大手とし、台地全体を城域と想定した（吉田 1999）。しかし、城を拠点とした合戦において、敵地から自城までの道程や自城を中心としたある程度の領域に守備的構造を施すことは当然のことで、すべてを城域とすることが妥当かどうかは城ごとに検討が必要である。「城域」を狭く捉えるならば、その周囲に配された「罫」の範囲は「作戦領域」と表現する方が良いかもしれない。

1991年には東海大学相模西部地区歴史文化研究会の発掘調査によって天徳寺境内の東側裾部の堀の状況が明らかにされた。調査では上部の幅8m前後、深さは東側で4m前後、西の天徳寺側で8m前後、法面角度は下部で75°、上部で60°と、堀の規模と断面形状が確認された。この調査では天徳寺側の曲輪縁辺部に土塁の基部が確認されたほか、調査区の南側に掘り残された障子の一部が検出され、橋の存在が想定されている。



図5
天徳寺東側の堀
(発掘調査前 平成20年)

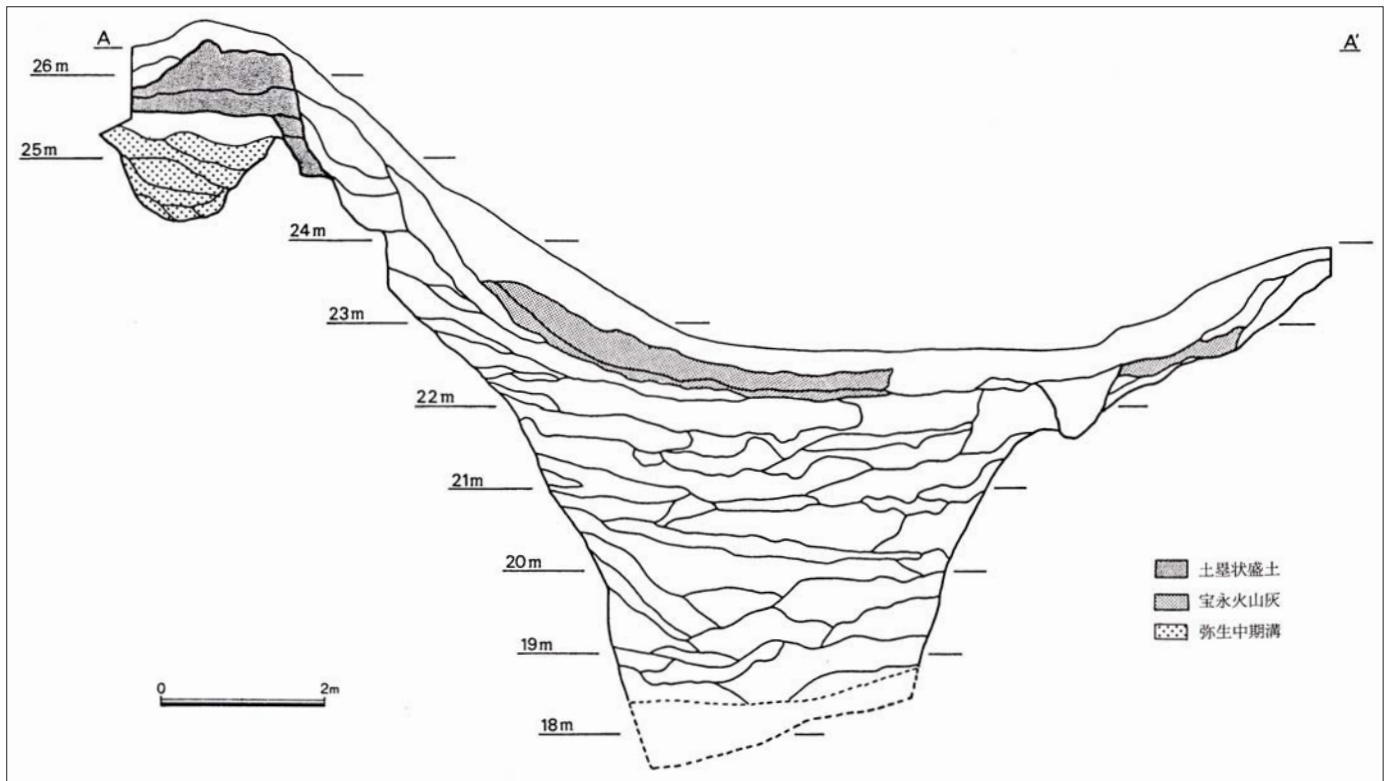


図6 天徳寺東側の堀 調査断面図（東海大学校地内遺跡調査団報告5より転載）

5 真田・北金目遺跡群の発掘調査

区画整理事業に伴って平成7年から開始された真田・北金目遺跡群の発掘調査は天徳寺周辺の真田城域にも及び、天徳寺を囲む堀の姿がより詳細に確認されたほか、これまで想定されていなかった位置での堀の検出事例が相次いだ。いくつかの地点の状況を見てみる。

① 10区

天徳寺の北側に位置する調査区。天徳寺墓地よりも一段下がり、大根川右岸の沖積低地に面する一角で、北側の腰曲輪が想定されていた地区である。台地の裾部を区切る東西方向の堀と、外縁を弧状に巡る堀によって区画が創り出され、中央東寄りの位置に南北から堀を出して区画を東西に区分している。北からの堀



図7 真田・北金目遺跡群で真田城関連遺構を検出した調査区



図8 天徳寺北側 10区の調査 (写真：平塚市教育委員会)

は逆L字に曲げられ、土橋に対して横矢を掛けている。また、東端部近くにも堀切を設けて東側の区画を分割している。

② 51A・D区

天徳寺墓地の東側の調査区。東側を囲む堀の外側の形状が確認された。墓地の法面が崩れる怖れがあるため堀の内側は完掘していない。北端は10区の南側東西堀に連結して天徳寺境内の高地を囲堯すると見られる。南は東海大学相模西部地区歴史文化研究会による調査地点へ向けて更に延びる。検出範囲の北寄りに柱穴を伴う障子が設けられており、天徳寺境内と東側の曲輪とを連絡する東西方向の橋がかけていたと見られる。南部で東側に折れを設けている。

③ 51B区

天徳寺の南東側の調査区。南西～北東方向の堀が大きく折れる部分である。東側の折れは上



図9 天徳寺東側 51A・D区の調査 (写真：平塚市教育委員会)

図10 天徳寺東側 51A・D区の堀 検出状況 (写真：平塚市教育委員会)



図 11 天徳寺南東側 51 B 区の堀検出状況 (写真：平塚市教育委員会)



図 12 天徳寺南東側 51 B 区の堀 断面の状況 (写真：平塚市教育委員会)

端部が弧状に広がり、堀底は深く掘られて段違いの障子を創り出している。西側の折れとの形状の違いは、改修による守備機能の強化を示している可能性もある。

この調査は堀の断面の全

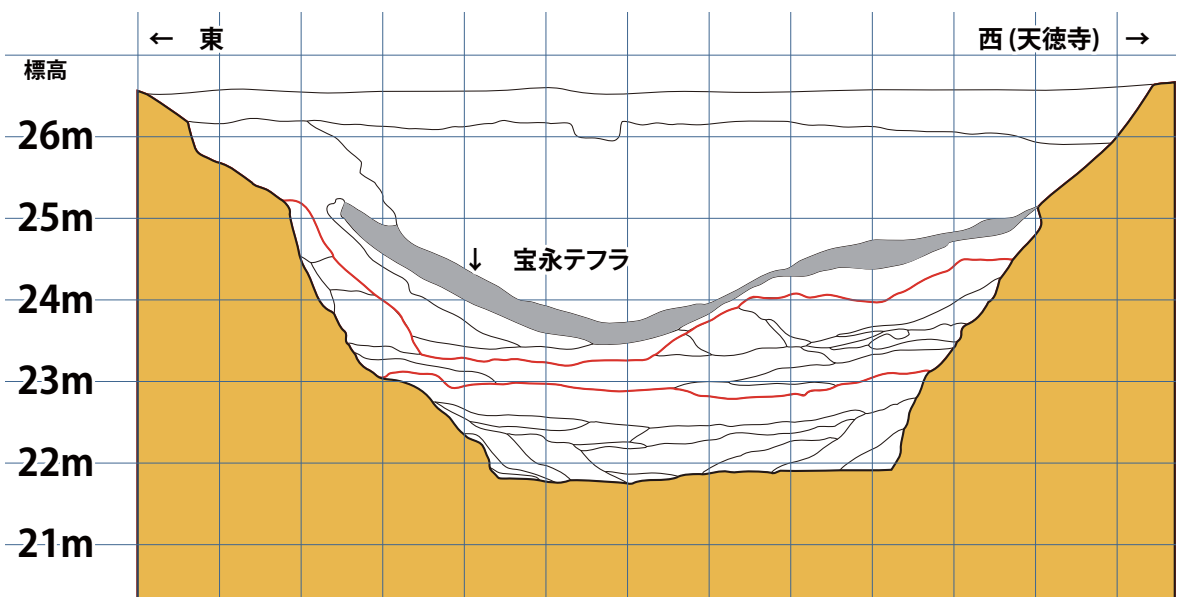


図 13 天徳寺南東側 51 B 区の堀 土層堆積状況

容を観察できる数少ない機会であった。調査区の南西端、南北方向の堀の断面を北から見たところ、堀の埋没過程を示す土層堆積は一様に埋没したのではないことを示していた。堆積土層中には、堀底らしき3か所の平坦な土層が見られ、少なく



図 14 51 B区東端の堀 検出状況 (写真：平塚市教育委員会)

とも2回の改修を受けていると考えられる。また自然堆積した宝永テフラの状況から、この堀は18世紀初頭にはその存在が目視できたはずである。しかし、その後短期間に埋没しており、『新編相模国風土記稿』が編纂される19世紀には平坦な農地になっていたと考えられる。

また51 B区東端では、鶴巻方面へ北上する道路が台地上から沖積地へ下る中腹の西側で大型の堀の北側が確認されている。南側宅地の法面保護のため堀の南側は完掘していないため、南から延びる堀の北端部であるのか、短い東西方向の堀の北側部分なのか判別できないが、東西約19mの規模があることから後者と考える。ここでは堆積土の上層から成人の頭骨と鉄砲の玉が出土している。堀の機能がほぼ失われている時期のものともみられている。



図 15 51 B区東端の堀 鉄砲玉検出状況 (写真：平塚市教育委員会)



図 16 59 A区の堀 検出状況 (写真：平塚市教育委員会)

④ 59 A区

天徳寺の南方、東西方向の現道に沿った宅地で確認された堀で、ほぼ直角に曲がる折れの部分2か所が検出された。西側の折れは東側のものと連結する方向に折れている。両者をつなぐと、南西方向に開いた大がかりな横矢になりそうである。

6 真田城の構造

検出された堀の状況から城館構造の想定を試みるが、堀からの出土遺物が極めて少ないため各部分の構築年代を特定することは困難で、すべてが同時期に機能していたと考えるのは妥当ではない。また、一つの堀でも51B区の堀に見られるように、時期によって堀の規模や形状が変化している点を考えると、ある特定の時期の真田城を正確に復元するのは難しい。こうした制約を踏まえて城域を8地区に分けて見てみる。

- ① 天徳寺地区 大規模な堀によって囲堯される天徳寺地区は、従来の見解通り城域の中核と考えられる。地区内の細分は不明であるが、現在の寺院本堂と墓地、あるいは墓地の中での南北に分かれる可能性もある。本地区への通路は南西面と南東部にある。南西地区と連絡する南西面の状況については、現在の寺院参道にあたるため詳らかでない。地区の南東部、東地区・南東地区との結節点では、大型の堀の折れや土塁方向の食い違いがあり、複雑な虎口を形成するものと思われる。
- ② 北地区 天徳寺地区の北側を防御する帯曲輪である。中型の堀により東西3ブロックに分かれ、横矢を配置する重厚な設計になっているが、天徳寺地区・東地区との連絡は不明である。
- ③ 東地区 天徳寺地区の東側を防御する区画である。小規模な堀によって3分割される可能性がある。天徳寺地区との連絡には2か所の橋が用意されていたようだが、これに対応して天徳寺地区も南北に2分割されるかもしれない。鶴巻方面からの交通路に面し、城内へ通じる要所となっているが、この地区を通して中枢部に向かうには、天徳寺地区と南東地区からの攻撃を受けながら、狭く高低差のある通路を目指すことになる。
- ④ 南東地区 これまで想定されていなかった大規模な堀の発見に基づいて区画を想定した。金目方面と糟屋方面とを結ぶ南北方向の粕谷道と、岡崎方面から秦野方面とを結ぶ東西交通路に面し、それぞれの通行を制限する位置にある。また、地区の北東側にあたる天徳寺・東・南東の3地区の接点には、城域北東方面からの侵入を意識した複雑な虎口を形成している。
- ⑤ 南西地区 天徳寺与一堂の南側の谷を堀に由来する地形と考えると一画が想定できる。天徳寺地区との連絡の詳細については不明であるが、従来大手と想定されている西方面に対する前衛的な区画と考えられる。南西部の堀に折れが確認さ

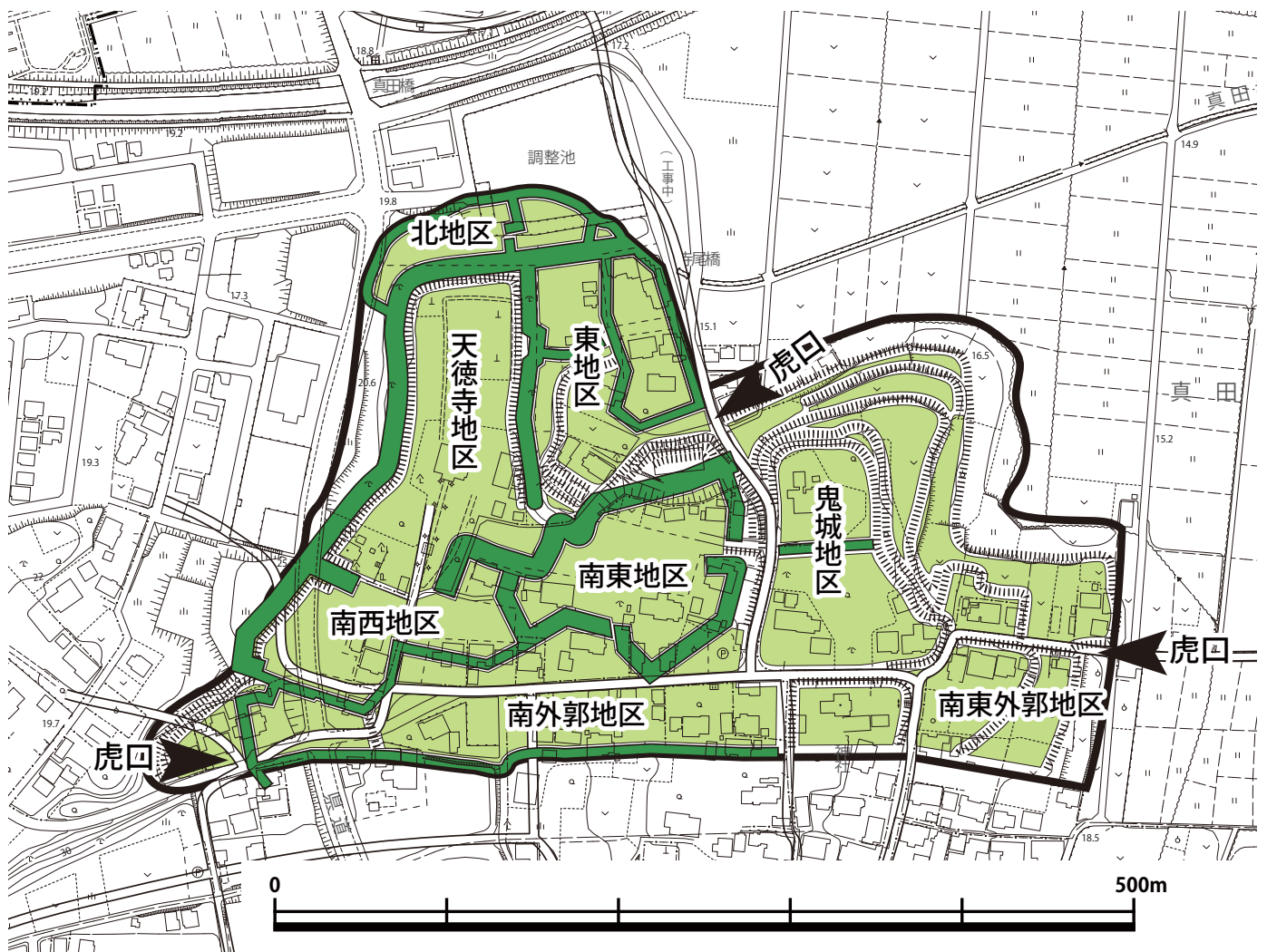


図17 真田城の構造想定

れており、橋が架けられていた可能性がある。

⑥ 南外郭地区 東西交通路と直接関係する謂わば城域の外縁部として、南東地区や南西地区の前面を防御している。城館当時の東西交通路が現道と差が無いとすれば、その交通路を中に取り込むことになり、あるいは屋敷を主体とする「城下」に相当する可能性もあろう。

⑦ 鬼城地区 東部に位置する小字鬼城(オンジロ)の周辺は、今回の区画整理事業の事業区域外にあたり、発掘調査が及んでいない。その詳細は今後の調査に委ねられるが、旧来の地形が良く遺存していると考えられ、城域の北東方向から東方向を窺う展望所として、また北・東方面からの攻撃に対する守備行動の指揮所の役割が考えられる。東方面から台地に上る道路が屈曲する形状は、東の大手とも言うべき景観を見せている。

⑧ 南東外郭地区 鬼城地区同様、発掘調査が及んでいないため詳細は不明。現地形の状況と真田神社ならびに交通路との位置関係により想定した。

7 真田城の時代

平安時代末期、相模国の有力な在庁官人であり武士団であった三浦一族は、新たな経済基盤獲得のため相模中央部の沖積地開発に乗り出した。その役目を負った惣領三浦義継の四男義実、開発地の名を冠して岡崎義実と称した。義実の嫡男と一義忠は岡崎から大根川・鈴川の低地を挟んで西南西へ約2kmの真田の地を与えられ、真田(佐奈田)義忠と称した。実際には北金目台地周辺は縄文時代以降断続的に集落が営まれ、台地下の沖積地の土を分析した結果では古墳時代以降にはイネ科植物の花粉が多出することがわかっており、古代末の時点で既に未開の地ではなかった。しかし、金目川が形成した広大な沖積地は現在でも神奈川県下随一の水田地帯であり、その更なる開発には大きな魅力があったと考えられる。

一般に真田城の築城者は真田義忠と説明されているが、平安時代末期の武士の館は中世後半の城郭とは異なる景観を呈していたと見るべきである。台地上の広い範囲を城砦化してそこに居住するのではなく、台地の鞍部、中腹や裾部に平場を造り出して比較的小規模な堀と土塁で囲堯した館を構え、高所には有事の際の軍事施設を配置したと考えられるが、今のところ真田義忠に関する時期の遺構は確認されていない。現時点では台地東側から北東側の裾部、広大な沖積地を眼下に見る真田の集落域に眠っている可能性が高いと考えられる。

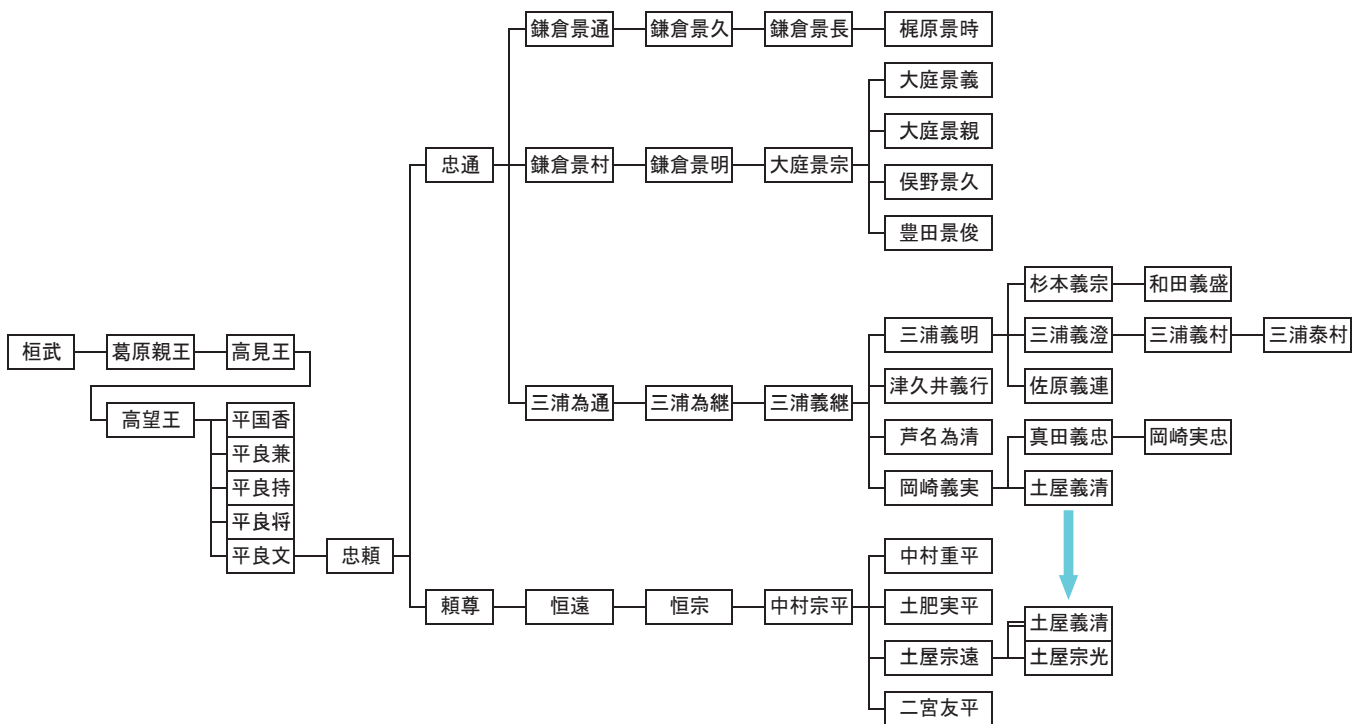


図 18 相模国武士団の系図 鎌倉党・三浦党・中村党

それから約300年後、15世紀末から16世紀初頭に突如真田城は相模国の主導権を争う舞台として歴史に登場する。当時の関東は長享の乱と言われる争乱の最中で、関東管領山内上杉家(顕定)とその庶流で相模国を地盤とする扇谷上杉家(朝良)との対立を軸に混乱していた。

扇谷上杉朝良は糟屋館(丸山城 伊勢原市)を本拠とし、岡崎城の三浦氏、小田原城の大森氏、武蔵の太田氏を被官として南関東に勢力を築き、山内上杉氏と長年抗争を続けていた長尾景春と連携して山内上杉顕定と対峙していた。時に堀越公方を滅ぼして伊豆国を制圧した伊勢宗瑞は、関東の争乱に介入を開始し扇谷上杉方に加担していた。上杉顕定文書に記される明応五年(1496)の軍事行動は、相模国内の形成を有利に運ぶべく山内上杉顕定が古河公方足利政氏を奉じて侵攻したものであり、これに成功する。

それから8年後の永正元年(1504)、伊勢宗瑞は駿河守護職今川氏親とともに扇谷上杉朝良に加勢して、武蔵国立川原に

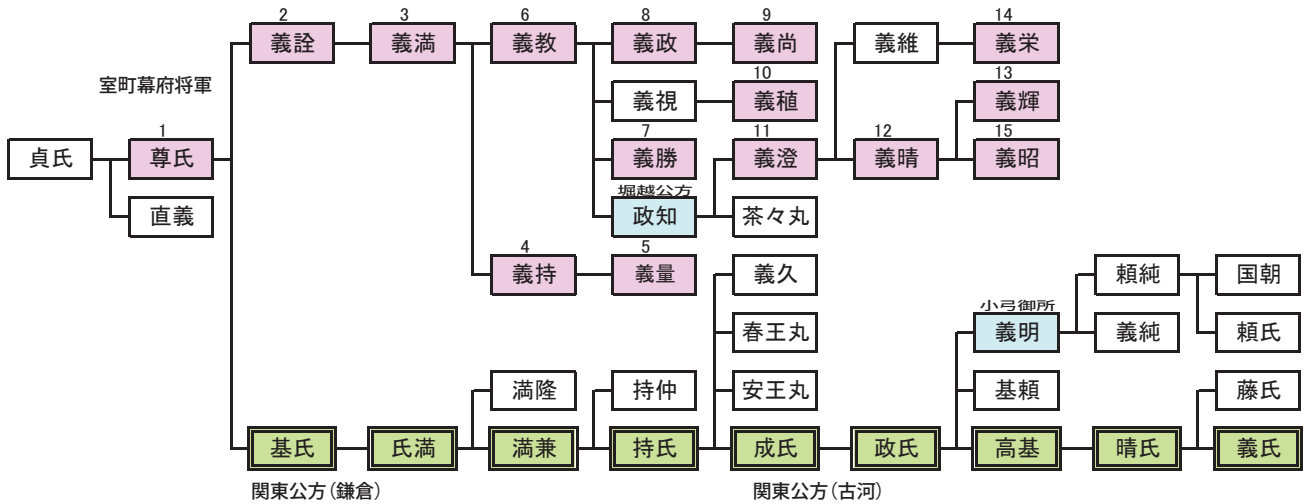


図19 足利氏の系図 室町將軍・関東公方・堀越公方・小弓御所

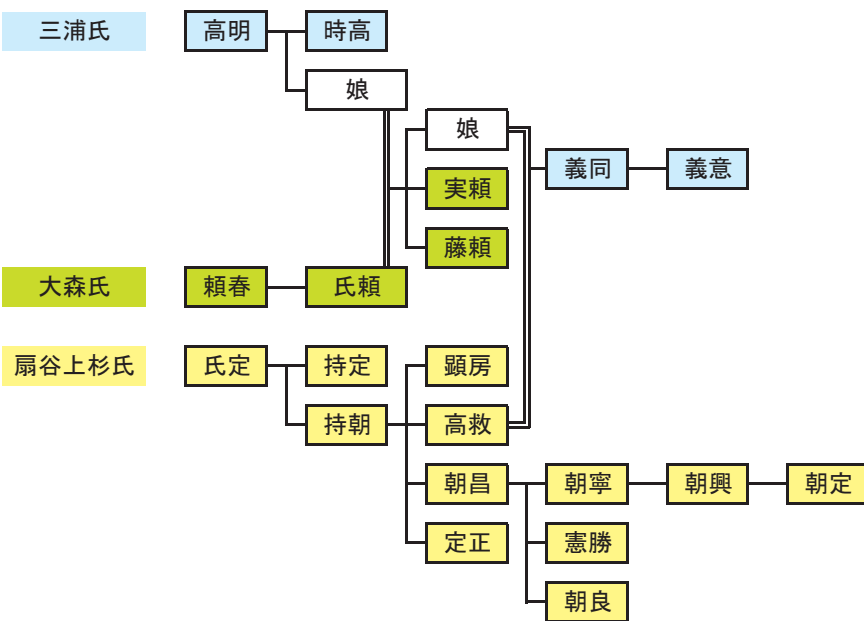


図20 相模国人の系図 扇谷上杉氏・三浦氏・大森氏

において山内上杉顕定軍を破るが、越後守護代の長尾能景の加勢を得た顕定の反撃により、朝良の武将上田右衛門尉が守る真田要害は陥落する。翌永正二年(1505)に扇谷上杉朝良が降伏する形で両上杉家が和睦し長享の乱が終結する。

その後、伊勢宗瑞と両上杉氏との戦いが繰り返されるが、永正八年(1511)には伊勢宗瑞と扇谷上杉朝良が和睦、宗瑞は翌年岡崎城の三浦義同を攻撃して三浦半島に追い落とし、相模国中西部を掌握する。この間の真田城の動向を記した記録は伝えられていないが、宗瑞による岡崎城攻撃の時点では既に宗瑞が掌握していたとすべきであろう。

真田城の記録を見る限り、城砦としての機能は15世紀後半の享徳の乱を契機

とする相模国内の争乱期から、伊勢宗瑞による相模国西部の制圧までの数十年間を最盛期とするのが妥当であり、大規模な造成や縄張りはこの時期に整備されたものであろう。なかでも記録に残る明応五年から永正元年とその前後の時期、真田城は相模国における扇谷上杉氏の本拠である糟屋館と相模西部とを連絡する要地として山内上杉氏が標的とする一方、扇谷上杉氏は重臣上田氏の一族を配して守備を固めている。両上杉氏の攻防の最前線となっていた情勢の中で、発掘調査で検出された大型の堀による城館構造が整備されたのではないだろうか。現在うかがい知ることのできる城の姿は、相模国内を掌握する扇谷上杉氏とその重臣で近隣の岡崎城を拠点とする三浦氏、あるいは城主に配された上田氏によって整備された形を骨格として、伊勢宗瑞が岡崎城攻略のための拠点として改修した部分が加わっていると考えられる。

西暦	元号	項目
1040	長久元年	源頼義、相模守に任じられる。
1051	永承6年	前九年の役勃発。
1086	応徳3年	後三年の役勃発。
1117	永久5年	鎌倉景政、大庭の開発地を伊勢皇大神宮に御厨として寄進。
1145	久安元年	源義朝、大庭御厨に侵入。
1156	保元元年	保元の乱。
1159	平治元年	平治の乱。
1160	永暦元年	源頼朝、伊豆に流される。
1167	仁安2年	平清盛、太政大臣に任じられる。
1180	治承4年	源頼朝挙兵。石橋山合戦。 (真田義忠討死)
1184	寿永3年	木曾義仲滅亡。一の谷の戦い。
1185	文治元年	屋島の戦い。壇の浦の戦いで平家滅亡。 平宗盛ら唐河原を通り相模川を渡って 鎌倉に護送される。
1192	建久3年	源頼朝、征夷大將軍となる。
1194	建久5年	源頼朝諸国国分寺の修復を命じる。
1198	建久9年	稲毛重成、相模川に橋を作り亡妻の供養をする。
1199	正治元年	源頼朝没。
1200	正治2年	岡崎義実没。
1213	建保元年	和田合戦。岡崎氏、土屋氏ら敗れる。
1219	承久元年	源実朝、暗殺。藤原頼経、田村別荘に逗留。
1221	承久3年	承久の乱。
1247	宝治元年	宝治合戦で三浦氏惣領家滅亡。
1274	文永11年	文永の役。
1281	弘安4年	弘安の役。
1331	元弘元年	元弘の変。楠木正成、赤坂城にて反旗。 幕府は二万の大軍で攻撃、正成落去。
1332	元弘2年	楠木正成、千早城を築城。赤坂城を奪還。
1333	元弘3年	鎌倉幕府軍、千早城を攻撃。楠木軍はわずかの兵で籠城し幕府軍を撃退。新田義貞、鎌倉に進攻し鎌倉幕府滅亡。
1335	建武2年	中先代の乱(相模川を挟んで北条軍・足利軍が対峙)。足利尊氏、建武政権に反旗。

西暦	元号	項目
1336	延元元年	足利尊氏、北畠顕家らに敗れ九州に逃れるも、再度上京し畿内を押さえる。 後醍醐天皇、吉野へ逃れ南朝を建てる。
1338	延元3年	足利尊氏、征夷大將軍となる。
1409	応永16年	足利持氏、関東公方就任。
1416	応永23年	上杉禅秀の乱。前管領上杉氏憲が関東公方足利持氏に反旗。
1417	応永24年	大森頼春(安楽斎)小田原築城か。
1438	永享10年	永享の乱。將軍と関東公方が対立。幕府方の上杉持房・今川範忠、高麗山に布陣。持氏方木戸持季、八幡林に布陣。
1439	永享11年	扇谷上杉持朝、修理大夫に任官。大名の家格を得る。
1440	永享12年	結城合戦。結城氏に呼応し、大森伊豆守挙兵。幕府方上杉修理亮と今川範忠、徳延・平塚にそれぞれ布陣。
1441	嘉吉元年	扇谷上杉持朝、相模守護に補任か。
1449	宝徳元年	足利成氏、関東公方就任。
1450	宝徳2年	江島合戦。足利成氏に両上杉家が反旗、敗戦によって上杉持朝、顕房は七沢要害に立て籠もる。
1454	享徳3年	享徳の乱勃発。関東公方成氏が管領上杉憲忠を殺害。
1455	康正元年	足利・上杉、相模国島河原(大島/下島/小鍋島)で合戦。上杉氏が成氏を古河に放逐。
1456	康正2年	上杉方三浦時高、岡崎城を奪取。大森安楽斎、小田原奪取。
1458	長祿2年	足利政知、堀越に下向(堀越公方)。
1467	応仁元年	応仁の乱勃発。
1473	文明5年	山内上杉氏の内訌。長尾景春、古河公方方として鉢形城で反旗。
1476	文明8年	伊勢宗瑞、興国寺城主となる。
1477	文明9年	両上杉軍、長尾景春に敗退。
1482	文明14年	幕府と古河公方和睦(都鄙和睦)、享徳の乱以来の争乱終息。
1486	文明18年	扇谷上杉定正、糟屋館(丸山城)にて太田道灌を謀殺。

西暦	元号	項目
1487	長享元年	長享の乱勃発。両上杉氏の抗争。三浦高救・義同は山内方につく。今川氏親家督相続。
1488	長享2年	実蒔原で両上杉(扇谷定正、山内顕定)合戦。
1493	明応2年	伊勢宗瑞、伊豆侵攻。
1494	明応3年	大森氏頼没。三浦時高、養子義同に新井城にて討たれる。扇谷上杉定正没。
1495	明応4年	伊勢宗瑞、大森藤頼(?)を逐い小田原城を奪取か(一説)。
1496	明応5年	宗瑞軍、山内顕定軍真田で戦闘。(上田右衛門尉要害実田)
1504	永正元年	伊勢宗瑞・今川氏親・扇谷朝良軍、立川原で山内上杉顕定・憲房軍を破る。上杉顕定・長尾能景軍真田要害を攻略。
1505	永正2年	扇谷上杉朝良と山内上杉顕定和睦。
1506	永正3年	永正の乱勃発。古河公方足利政氏と嫡子高氏が対立。三浦義同、下総侵攻。
1510	永正7年	伊勢宗瑞、長尾為景に呼応して蜂起。高麗寺・住吉要害を取り立てる。
1511	永正8年	伊勢宗瑞、扇谷上杉朝良と和睦。
1512	永正9年	伊勢宗瑞、岡崎城を攻略、三浦義同は東郡住吉に後退。
1513	永正10年	伊勢宗瑞と三浦義同の合戦により、遊行寺焼失。
1516	永正13年	三浦義同・義意、新井城(三崎城?)に滅亡。
1518	永正15年	扇谷上杉朝良没。
1519	永正16年	伊勢宗瑞没(葦山城)。
1523	大永3年	伊勢氏を北条氏に改姓。
1524	大永4年	北条氏綱、江戸城奪取。
1533	天文2年	扇谷上杉朝興軍、大磯・平塚に進入、放火。
1535	天文4年	扇谷上杉朝興軍、大磯・平塚・茅ヶ崎・藤沢に進入、放火。
1536	天文5年	河東の乱(北条氏と今川氏の戦)。
1537	天文6年	扇谷上杉朝興没。北条氏綱、河越城奪取。

西暦	元号	項目
1541	天文10年	北条氏綱没。武田晴信、信虎を駿河に追放。
1542	天文11年	北条氏康による平塚市域の検地。武田晴信、諏訪に侵攻。
1546	天文15年	河越夜戦。扇谷上杉朝定討死。山内上杉憲政、平井城へ敗走。
1552	天文21年	山内上杉憲政、越後へ敗走。
1554	天文23年	相模・駿河・甲斐同盟成立か。
1559	永禄2年	北条氏政、家督相続。長尾景虎、関東管領就職内定。
1560	永禄3年	桶狭間の戦い。
1561	永禄4年	長尾景虎相模進入。山下・宿河原・田村・大神・八幡に布陣、鎌倉にて上杉氏を継ぐ(上杉政虎)。第4次川中島の戦い。
1568	永禄11年	織田信長、観音寺城を攻撃。六角義賢、義治落去。
1569	永禄12年	武田信玄、平塚に進入、小田原城を攻撃。三増峠合戦。
1570	元亀元年	姉川の戦い。
1573	天正元年	武田信玄没。室町幕府滅亡。浅井氏滅亡。
1574	天正2年	真田城地に天徳寺創建(鈴木隼人)。
1575	天正3年	長篠の戦い。
1576	天正4年	織田信長、安土城築城開始。
1578	天正6年	上杉謙信没。
1579	天正7年	安土城完成。
1582	天正10年	甲斐武田氏滅亡。本能寺の変。山崎の合戦。
1583	天正11年	賤ヶ岳の戦い。
1584	天正12年	小牧・長久手の戦い。
1585	天正13年	豊臣秀吉、関白就任。
1590	天正18年	豊臣秀吉、小田原攻撃。石垣山城築城。小田原北条氏滅亡。
1592	文禄元年	文禄の役。
1596	慶長元年	中原御殿完成。
1597	慶長2年	慶長の役。
1600	慶長5年	関ヶ原の戦い。
1603	慶長8年	徳川家康、征夷大将軍となる。

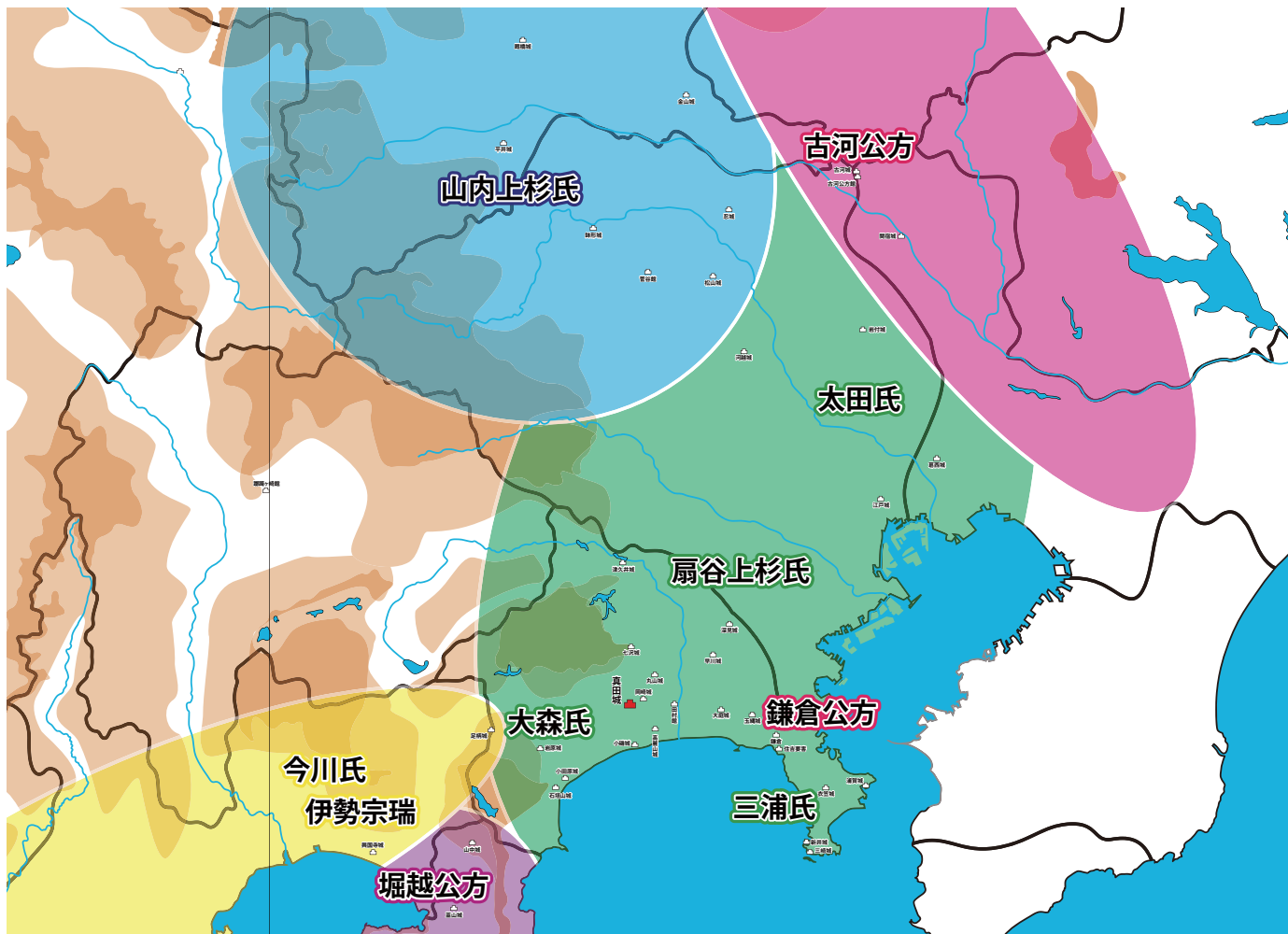


図 21 15 世紀～ 16 世紀初頭の関東

引用・参考文献

小笠原清他	1980 『日本城郭大系 6』 新人物往来社
難波明 / 草柳卓二ほか	1982 『中世平塚の城と館』 平塚市観光協会
難波 明 / 関 恒久他	1985 『相模岡崎城跡総合調査報告書』 平塚市教育委員会
平塚市	1985 『平塚市史 1 資料編 古代・中世』 平塚市
平塚市	1990 『平塚市史 9 通史編 古代・中世・近世』 平塚市
吉田博之	1990 「真田城城域の推定 - 王子ノ台遺跡西区検出のテラス状遺構に関連して -」 『東海大学校地内遺跡調査報告 1』 東海大学校地内遺跡調査委員会
相模西部地区歴史文化研究会	1995 「真田城東堀の調査」『東海大学校地内遺跡調査報告 5』 東海大学校地内遺跡調査委員会
東海大学校地内遺跡調査団	1999 『王子ノ台遺跡 第Ⅱ巻 歴史時代編』 東海大学出版会
石丸 熙	1999 「真田城について」『王子ノ台遺跡 第Ⅱ巻 歴史時代編』 東海大学出版会
吉田博之	1999 「真田城の構造」『王子ノ台遺跡 第Ⅱ巻 歴史時代編』 東海大学出版会
平塚市	2003 『平塚市史 11 下 別編考古 (2)』 平塚市
河合英夫 / 秋山重美ほか	2003 『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書 4』 平塚市真田・北金目遺跡調査会 / 都市基盤整備公団
若林勝司 / 川端清倫ほか	2008 『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書 6』 平塚市真田・北金目遺跡調査会 / 独立行政法人都市再生機構
若林勝司 / 川端清倫ほか	2011 『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書 8』 平塚市真田・北金目遺跡調査会 / 独立行政法人都市再生機構
平塚市博物館	2012 『平成 23 年度春期特別展 平塚と相模の城館』 平塚市博物館
若林勝司 / 福田健司ほか	2013 『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書 10』 平塚市真田・北金目遺跡調査会 / 独立行政法人都市再生機構
古記録・軍記	吾妻鏡 鎌倉大日記 平家物語 源平盛衰記 承久記 太平記 鎌倉大草紙 今川記 永享記 鎌倉九代後記 相州兵乱記 北条記 北条五代記 北越軍談 甲陽軍鑑 新編相模国風土記稿